

「見えているのに、見えていない」
エフェソの信徒への手紙 1章 15～23節

私たちは目に見えるものを確かだと思いがちですが、人生には「大切なものがすぐそばにあるのに見えていない」ということが起こります。これは信仰においても同様です。パウロがエフェソの教会に宛てた言葉は、すでに信仰を持ち、愛に生きている人々のための祈りです。パウロが彼らに向かって、なお「心の目を開いてください」と祈るのは、すでに与えられている神の恵みの大きさが、まだ十分には見えていないからです。信仰とは一度わかれば終わりではなく、信じているからこそ、なお測り知れない神の愛の深さに気づかされていく歩みなのです。

心の目が開かれるとき、私たちは次の3つのものが見えるようになります。①神の招きによって与えられている希望。これは単なる願望ではなく、神の救いの計画の中に自分が確かに置かれているという確信です。希望は状況からではなく、神の真実から生まれるのです。

②聖なる者たちが受け継ぐ栄光。キリストによって神の子（相続者）とされ、神からどれほど尊い存在として見られているかという自己理解です。これが私たちの信仰生活の確かな土台となります。

③信仰者に働く神の力の偉大さ。キリストを復活させ、天に上げ、すべてを統治する主とされた絶大な力です。この死を打ち破る力が、今も信じる者のうちに働いています。

ここで重要なのは、心の目が開かれるとは「新しい何かが与えられる」のではなく、「すでに与えられている現実の中に、神の働きが見いだせるようになる」という視点の転換です。たとえ苦しみの中にあっても、そこに神の導きが見えるとき、私たちの生き方は変わります。

では、なぜ私たちは見えないのでしょうか。それは、私たちが「自分の力で見よう」とし、「自分は見えている」と思っているからです。かつてのパウロ自身がそうでした。彼は、社会的・知識的勝者として「すべてが見えている」はずでしたが、ダマスコへの途上で復活のキリストの光に照らされたとき、視力を失い、三日間の暗闇に置かれました。そこで彼は、自らの誇りが崩れ去り、徹底的な弱さを事実として受け入れたとき、彼の目から鱗が落ちて「心の目」が開かれました。自分の知恵が「見えなくなった」ときに、神の恵みの力が「見えるようになった」のです。神は人間の知性で「理解する」対象ではなく、神ご自身によって「示される（啓示）」お方です。人間には自力で神を知る力はなく、神が道を開いてくださるからこそ知ることができるのです。

神は見えない主の支配を、地上の「教会」を通して示されます。教会は不完全で、傷つき、ぶつかり合う人間の集まりに見えるかもしれません。しかしパウロは、教会こそが「キリストの体」であり、万物を満たす方の満ち満ちている場だと言います。教会とは、立派な人が集まる場所ではなく、「見えない主が、見えるかたちで働いてくださる場所」なのです。私たちが自らの弱さを認め、十字架の前にへりくだり、互いに赦し合って交わるとき、そこに見えないキリストの平和が実現します。

世間の自己啓発の類は「あなたには無限の可能性がある。自分を信じなさい」と語りかけますが、聖書は「あなたには何もありません。しかし、神の前にへりくだるとき、キリストの完全な力があなたのうちに働く」と語ります。私たちの知恵や力ではなく、神が示し、生かしてくださるからこそ、私たちは歩むことができます。今も生きて働いておられる主を信仰の目で見つめ、希望をもって、それぞれの遣わされた場所へと歩み出してまいりましょう。